

■ 第1回 SPARC Japan セミナー 2013 「SPARC と SPARC Japan のこれから」

2013年6月7日(金) 一橋講堂 参加者:239名

第1回目の SPARC Japan セミナーは「オープンアクセス・サミット 2013 学術情報のオープン化に向けて～現在の到達点と未来の展望～」(平成 25 年 6 月 6 日～7 日)の一環として、第 4 期 SPARC Japan の活動をスタートさせるにふさわしく SPARC North America の Executive Director である Heather Joseph 氏をお招きし、6 月 7 日(金)に開催しました。各講演内容は下記のとおりです。なお、詳細は SPARC Japan の web をご覧ください。

(<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2013/20130607.html>)

【Open Access: Delivering on the Promise】

Heather Joseph (SPARC North America)

基調講演として、米国 SPARC 活動状況や Open Access(以下 OA)について、以下の 3 つの側面について取り上げられた。

1. 学術情報流通におけるプレッシャー
 - 1-1. インターネットやテクノロジーの進歩による新しいネットワークツールの出現
 - 1-2. 電子情報の氾濫
 - 1-3. 図書館予算の圧迫
2. OA の考え方「Open Access= Access + Reuse」の再確認と、実現のための取り組み・成果
 - 2-1. OA ジャーナルの急激な増加と OA 出版を選択する著者の増加
 - 健全に成長しており、持続可能性だけでなく採算性もあることが明らかに。
 - 2-2. OA リポジトリの進展
 - コンテンツ数の増加と内容の充実。
 - 2-3. 著作権とライセンスの問題
 - OA 下の Access と Reuse を実現するため、従来のライセンスに柔軟性をもたせる。
 - 2-4. OA ポリシー
 - 大学等で制定されるものと、国家・助成団体により制定されるものがある。OA 義務化等、OA に対する意識や期待の高まりが反映される。
3. 新しい OA のコンセプトを実現するため、新しいシステムにおける課題や問題点
 - ライセンスの問題(完全に再利用可能な著作権の確立)が最も重要であり、現在広がりつつある様々な論文単位の評価指標 (ALMs: Article Level Metrics) をさらに普及させ、よりオープンな学術コ

ミュニケーションの確立と、そうした環境に適した学術文化を促進していく必要がある。

今後も SPARC 活動はグローバルな連携と共同活動によってさらなる発展を目指していきたい。

【SPARC Japan～来し方行く末～】

尾城 孝一 (国立情報学研究所)

SPARC Japan の誕生から将来についての展望を解説された。

米国の SPARC と比較すれば、学術コミュニケーションの主体を研究者の側に取り戻すことを一つの目的とし、商業出版社の寡占化による価格高騰へ対抗する米国 SPARC に対し、SPARC Japan では、まず日本の学協会等が刊行する学術雑誌の電子化を支援すること、日本特有の問題を解決することが目的だった。

第1期から第3期までは比較的順調に問題解決への取り組みと情報の共有を進めてきたが、大学図書館との連携やオープンアクセス化への対応という課題が残った。この課題のもとに、次期は国際的なオープンアクセスイニシアチブとの協調をはじめとする体制整備を計画する。特に、Article Processing Charge の機関負担モデルを調査検討し、大学図書館との連携を強めたい。

【SPARC への期待】

戸瀬 信之 (日本数学会)

日本数学会の出版事業と周辺の話題について、SPARC Japan への期待とともに紹介された。

日本数学会の論文誌 Journal of Math. Soc. Japan (JMSJ) は、SPARC Japan の支援のもとに電子化の端緒をつかみ、完全な電子化に成功しており、このほかに各種の刊行物を発行しているが、その多くの電子化を進め

てきた。

数学者の研究成果発表手段は、プレプリントを作成し、arXiv.orgなどに投稿したり、他の分野よりも多様な手段があるが、数学会ではこれらについて柔軟に対応してきた。大会の講演アブストラクト集、特別講演のビデオ収録などは最近の取組みで、特にビデオについてはアジア各国との協力を進めている。さらに各大学から発行されている国際誌をポータルとして形成した Digital Mathematics Library, DML-JPも発展中である。

SPARC Japanへは出版社との交渉に関するコンサルティング、モノグラフの電子化やDML-JP拡張への支援などを期待したい。

【パネルディスカッション】

モデレータ: 安達 淳(国立情報学研究所)

パネリスト: Heather Joseph (SPARC) / 戸瀬 信之(日本数学会) / 関川 雅彦(東京大学附属図書館) / 林 和弘(科学技術政策研究所)

安達モデレータの、ゲームのルールを変えるという、今回のOAサミットを通じた基調を確認する発言から始まっ

-----参加者から-----

Joseph氏の講演は大変わかりやすく、複雑な課題をクリアに説明して下さったと感じました。「Open Access= Access + Reuse」というフレーズは、OA活動の目指す方向をシンプルにかつ力強く表現していると思います。また、尾城次長の説明により日本のSPARC活動の経緯と特徴が理解でき、戸瀬先生のお話で第3期までに着実に成果を上げてきたことをうかがい知ることができました。パネルディス

-----企画後記-----

😊 Open Accessを巡る状況が大きく変化している現状と、そこへどのように関わっていくのか、あるいは関わらないのか、強く考えさせられたセミナーでした。開催まで二ヶ月のところまで届いたパネリストと講演者の推薦依頼に驚きながらもチラシの作成からニュースレターまで、何とか無事に乗り切ることができました。講演者の皆様、パネリストの皆様、参加者の皆様と事務局の奮闘に感謝致します。

北海道大学 大学院理学研究院 行木孝夫



講演 (Heather Joseph: SPARC North America)

た。

特に印象に残った発言として、林氏からの発言を示したい。Article Processing Chargeに依存したミドルクラスのOAジャーナルが普及する過程で、素性の怪しいジャーナルが出現しつつある。投稿先を定める目利きに図書館が関われるのではないかと。

また、APCを機関が拠出することは米国では一般的だとHeather氏からの発言があった。米国では多様なライブラリアンがあり、研究者との協力が比較的うまくいっているようだ。

関川氏からは、OAを推進する上での図書館の立場について、多くの学術誌がOA化された後の機関リポジトリの役割について考えるべきであるという意見、また、APCは結局のところ購読料と同じことではないか、という意見が示された。戸瀬氏からは学会の立場から、学術誌を国際的に販売、展開する出版社が日本に存在しないことが問題であり、個別の学会が展開することの問題を指摘する意見が述べられた。人文社会系の出版形態について、altmetricsを活用したアクティブな手法をもっと取り入れてよいのではないかと、という意見が出されている。

セッションでは、関川氏・林氏のAPCに関する問題提起について、大学図書館に何ができるか考えさせられました。オープンな学術情報流通への道は、誰か一人の力でゴールに辿り着けるものではなく、研究者・図書館・学会などの関係者・機関が手を取り合って進むものであるということ今回のセミナーで強く再認識いたしました。

国立情報学研究所 鈴木 美奈子

😊 まさに右も左も分からないような状態で、関係者の皆様には本当にお世話になりました。

図書館がやるべきこと、図書館の可能性はまだまだあるのではと考えさせられました。また図書館と研究者との協力関係を今後より一層深めていくことが不可欠だと感じます。

明治大学 生田図書館事務室 西脇 亜由子

😊 初めての試みで試行錯誤！それでも我慢強くフォローしてくれた今回のメンバーに感謝です!! 事務局



パネルディスカッション